



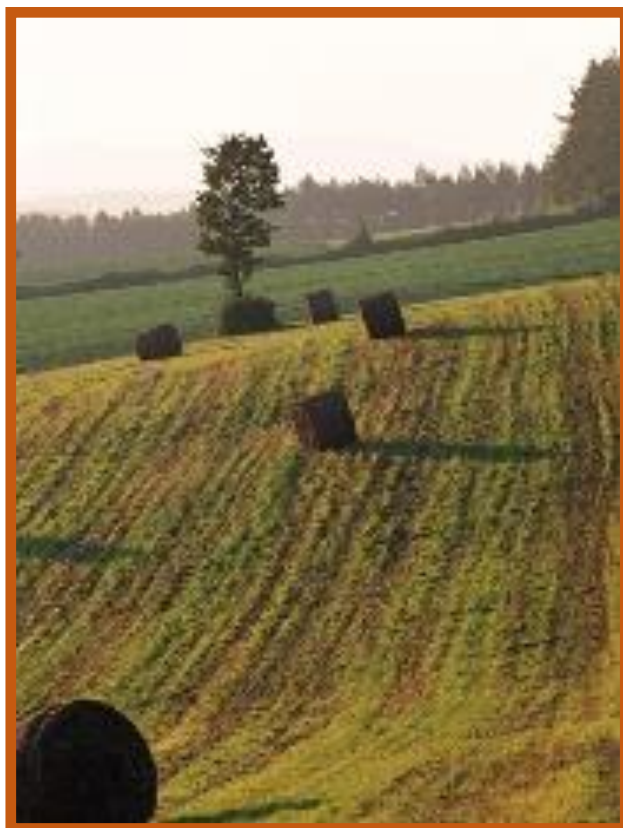
少子化に対応した活力ある学校 ①

少子化の進展に伴う今後の学校の在り方

全国的に公立小・中学校の児童・生徒数は、減少の一途をたどっています。本市においてもその傾向は同様であり、令和4年5月1日時点の児童数と就学前児童数（実数）を用いた、令和10年度の児童数の予測は、令和4年度が2,542人であるのに対し、令和10年度は2,139人です。その差は約400人、およそ1校分の児童数の減少が見込まれます。

義務教育段階の学校の目的は、児童・生徒の能力を伸ばしつつ、社会的自立の基礎、国家・社会の形成者としての基本的資質を養うことにあります。よって学校は、教科等の知識や技能を身に付けさせることはもとより、児童・生徒が集団の中で、様々な考えに触れ、認め合い、力を合わせ、切磋琢磨することを通じて学力を育み、社会性や規範意識を身に付けさせることが重要です。そうした教育を進めるためには、一定規模の児童・生徒の集団が確保されていることや、経験年数、専門性、男女比等について調和のとれた教職員の集団が配置されていることが必要になります。

学校規模の検討は、様々な要素が絡む課題です。しかしながら、飽くまで教育的な観点を中心に据え、学校教育の目的をより良く実現するために行うべきであると捉えています。



監督としての行動規範

2023年 WBC日本代表チーム監督 栗山英樹

「論語」に「君子は諸（こ）れを己に求め、小人は諸れを人に求む」というものがあります。人の役に立つような行いをする人は、成すべきこと責任は自分にあると考える一方、自分本位の考えをもつ人は、責任を他人に押し付ける、といった解釈が当てはまるでしょうか。

敗戦を選手に押し付けない。ミスを選手の責任にしない。監督就任から行動規範としてきたことです（後略）。

出典：「栗山ノート」（栗山英樹著 光文社）

※ 栗山監督の野球ノートは、古典や経営者の著書から抜き出した言葉で埋め尽くされているとのこと。